

人間にとって「走る」ことの意味に関する一考察

A study about the meaning of “running” for the human

1K10C009-2 浅川 祥史

主査 吉永武史 先生

副査 磯繁雄 先生

【序章】

「人はなぜ走るのか」これは人類にとって永遠の問いである。ランニングは容易に取り組める運動の一種であるが、「人はなぜ走るのか」という問いかけに対しては明確な答えが導き出されていない。また「世界ランニング史の完全版を書くことなど、到底不可能」(ゴタス、2011、p.9)と言われるように、ランニングの根源をたどることなど到底不可能なほどその始まりは遙か昔にさかのぼる。

「走る」ことに関する書物や文献は、非常に多種多様なものがある。このようなものが多く存在しているにも関わらず、「人はなぜ走るのか」という問いに答えようとするものは存在しない。

そこで本研究では、多種多様に存在する「走る」ことに関する研究の根本にある、人間にとっての「走る」ことの意味について、「走る」ことが取り上げられている様々な視点から考察することを目的とする。

【第1章】

第1章では、「走る」ということに関して、人類の発展の歴史、生まれた後の発育の過程、義務教育の時代、そして一生涯において「走る」ことに関わること、これらについて考察を行った。

私たち人間が発育の過程で如何にして走運動を取得したのか、また人類の発展の歴史の過程で、人類がどのようにして2足で「走る」能力を有してきたのかについて考察を行った。人類の発展の歴史については、今回は特別その分野に特化した考察ではないため不明確なものとなったが、「走る」ことが人類の本質的特徴であることが捉えられた。また人間は発育の過程でおおよそ2歳までに走運動を獲得することが分かった。

また、学習指導要領の変遷をふまえながら短距離走・長距離走の扱われ方にどのような変化が表れたのか、戦後から現在までの学校体育においてそれらがどのように扱われてきたのかについて検討した。その結果、陸上競技は常に基礎的な運動能力を高めるものとして位置づけられていたことが分かった。そして現在の学習指導要領が実践を試みる「生涯スポーツ」の観点から、「走る」ことが生活を豊かなものにし、健康で自己効力感を高めるものとして有効であることが分かった。

【第2章】

第2章では、競技スポーツである陸上競技に関して考察を行った。人類が短距離走を行ってきた歴史、長距離走を行ってきた歴史を見つめ、人類は常に最速を、限界を追い求めてきたことが明らかとなった。そして、お正月の風物詩となり、大学スポーツの花形である箱根駅伝についての考察では、箱根駅伝が人気を博するようになった背景には、テレビ放映の開始の影響が大きいことが分かり、またカレッジアイデンティティによりファンがファンであり続ける背景も明らかとなった。

【第3章】

第3章では、生涯スポーツを実践するにあたり、近年のジョギングブームの実態を明らかにし、人々の生活を豊かにするには、ジョギングが有効であることを示した。また数多く開催されるシティマラソンに関して考察を行う中で、絶大な人気を誇る東京マラソンなどのマラソンが近年のジョギングブームを後押ししていること背景が確認された。

最後に、人々が「走る」ことの意味について考察を行った。ここでは、「走る」ことが競走を意味するのではなく、人々の人生と結びつくものであるとの認識を得た。

【結章】

「走る」ことが人類の本質的特徴であることを踏まえ、生涯において私たちは「走る」ことに取り組むことを学んできた。私たちは本質的特徴を表現するために一生涯「走る」ことを行い、「走る」ことを生き甲斐とすると考える。以上のことを踏まえ、本研究において「走る」ことは私たちになくてはならないものであると捉え、「走る」ことは「人生」であるという結論に至った。

しかし、「走る」ことはその歴史を紐解くことなど不可能であり、どうしても筆者の主観が入り込んでしまう。本研究の最大の課題はこの点である。如何に客観的な事実と物事、また正確な歴史に基づいて、「走る」ことの意味は何かを明確化することを今後の課題としたい。